

## 播州赤穂方言文法概説

鎌 田 良 二

### はじめに

昭和三十年に兵庫県方言学会が生まれ、その年の八月下旬、有志で赤穂市の共同調査を行なった。その一部を島田勇雄・山内潤三・鎌田良二の三人でまとめたのが『播州赤穂方言の研究 語法篇』（兵庫県方言学会刊・昭和三十年十一月・謄写A5・五八ページ）である。

それから既に二十年の歳月が流れ、赤穂市の状況も大分変った。例えば、市の南東部の広い地域を占めていた塩田はなくなり、住宅地になっている。<sup>(1)</sup> すぐ近くの相生市の重工業会社<sup>(2)</sup>などがますます大きくなり、山陽新幹線の停車駅になった。

そこには当然、住民の移動、職業の変化、交通の変化などがある。それにともなう生活言語も何らかの変化があるだろうと考え、今回の調査を試みたのである。

したがって、本稿では前回の書『播州赤穂方言の研究 語法篇』（以下、「前回」と略す）との比較を中心にして述べることにするが、なお、前回が謄写であったことや印刷部数が少なく、会員配布を主にしたこともあって、本稿では前回に掲載した事項を重ねて記すことも多い。

なお、前回の担当は、「助動詞」——島田勇雄、「動詞・形容詞・形容動詞」——鎌田良二、「表現法」——山内潤三であった。

註(1) 入浜式製塩法から化学製塩法になって塩田四八六万平方メートルが住宅地になった。

(2) 石川島播磨重工業会社の従業員は六千人になっている。赤穂市からこの会社に通勤する人は多い。

### 調査のあらまし

昭和五十一年三月八日赤穂市教育委員会を訪ね、前回のインフォーマントであり、また、いろいろお世話頂いた当時、赤穂中学校、赤穂東中学校に勤務の司波幸作、元岡善治、木山正規、加藤良吉、秋山美佐子の五教諭の行方をおたずねした。

司波教諭は赤穂郡<sup>かほこ</sup>上郡町立上郡小学校長に、木山教諭は兵庫県教育委員会西播事務所(姫路)に、加藤教諭は鈴木と改姓、赤穂市教育委員会に、秋山教諭は退職し家庭に、そして元岡教諭は当時赤穂東中学校であったが現在は赤穂中学校に居られることを聞き、同校を訪ねた。

前回のインフォーマントの五氏に直接おたずねしたが、元岡・加藤(鈴木)氏以外は赤穂の地を離れておられるし、加藤(鈴木)氏は三月は殊に忙しくしておられたので、元岡教諭を中心としておたずねすることにした。

三月九日、赤穂市役所を訪ね、昭和三十年から五十年までの「市勢要覧」などを中心に人口・産業・交通等の変化を調査した。その一部を「調査の地点」の項に掲げる。

三月十一日、元岡教諭の紹介で、赤穂市御崎<sup>みさき</sup>の成人女四名と赤穂中学校生、女子四名について調査、元岡氏も加わって頂いた。(以下「調査Ⅰ」という)

三月十二日、大石神社の飯尾精宮司の紹介で赤穂市尾崎の成人男二名、女二名について調査した。「調査Ⅱ」とい

う)

四月二十六日、五月一日、中学生調査として、市立有年中学校尾崎教諭、赤穂中学校元岡教諭（木山氏は四月異動で赤穂中学校長に栄転）のお世話で、東中学校も、それぞれ男女生徒を調査した。（「調査Ⅲ」という）

被調査者氏名

調査Ⅰ

(住所)

(氏名)

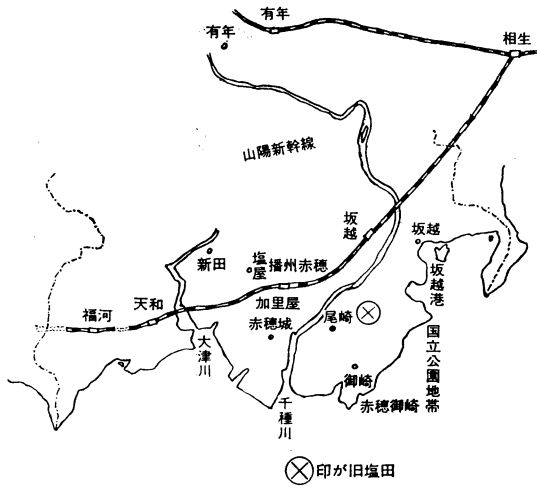
(性別) (生年月)

赤穂市御崎	平野 美智子	女	昭・二・一〇
〃 塩屋	中田 美代子	女	昭・二・五
〃 新田	西川 綾子	女	大・一〇・二
〃 北野中	橋本 俊子	女	大・九・八
〃 加里屋	青山 多恵子(A)	女	昭・三六・七
〃 上仮屋	岩井 奈保子(B)	女	昭・三六・九
〃 加里屋	松本 里加(C)	女	昭・三六・四
〃 上仮屋	富田 千景(D)	女	昭・三六・一一

(右の(A)(B)(C)(D)は助動詞・代名詞の項で記す)

調査Ⅱ

赤穂市尾崎木ノ下町	山本 岩太郎	男	明・四〇・五
〃	家根 長一郎	男	明・四四・三



調査Ⅲ

有年中学(有年)	男 十四名	女 十四名	馬場 君子
赤穂中学(加里屋)	男 十六名	女 十五名	女 明・四二・二
赤穂東中学(尾崎)	男 十七名	女 十六名	竹田 きみ
			女 明・三四・五

(氏名省略)

前回、昭和三十年の折には赤穂郡有年村は市と合併してないで、加里屋と尾崎を中心に調査したので、今回も加里屋を中心にする。加里屋は赤穂城を中心とする市の中央部を占める、尾崎は加里屋と千種川をへだてた沿岸地帯であり、もと塩田があったのもこの地域である。

調査の地点

兵庫県赤穂市は近畿方言圏の西端に位置し、中国方言圏に境を接している。

この地域の方言文法について前回、島田英雄氏は次のように記しておられる。

榎垣氏の説に、交野町を中心に五十キロの円内が内近畿

で、ドス、オス、ダス、オマス、ヤロを使い、百キロの円内が中近畿で、ジャロー、サ五のイ音便、降りヨルと降ツトルの区別などを使い、百キロ以上が外近畿だとされる。赤穂市は榎垣氏流に従えば、距離的には外近畿だが、語法的にはその中近畿的特色の各種を備えているし、更に、ダス、ヤロー、ナハル、テルのような内近畿的なものも持っている。その外の独自の播州方言的なものに、ダスの終止形のダハン、マスの終止形のマハン、打ち消しのヘンの変体ヒン、エン、ヘナ、推量のロなどを備えている。

このように地点としては外近畿であるが、内近畿、中近畿的要素をもっている。が、その後、播州工業地帯の進出により、阪神文化が西へ西へと延びていることや、私鉄、阪急電鉄も大阪から姫路行快速ができその回数もずいぶんふえてきている。昭和三十年頃には難しかった赤穂から神戸への通勤・通学も今では可能になっているし、近くの相生は山陽新幹線の停車駅でもある。

二十年前よりも阪神方面の影響が大きくなっているものと考えられる。

交通関係で、播州赤穂駅（国鉄）の助役の話では行先別切符売上枚数は、新幹線ができるまでは、姫路、三宮、大阪の順、次いで、東京、岡山、京都となっていた。が、新幹線ができてからは相生がもっとも多く、以下、姫路、三宮、大阪、東京、岡山、京都の順であるとのこと。

赤穂・相生間の国鉄赤穂線が開通したのは昭和二十六年である。それ以前は国鉄線がなく、私鉄赤穂鉄道が有年まで通っていた。

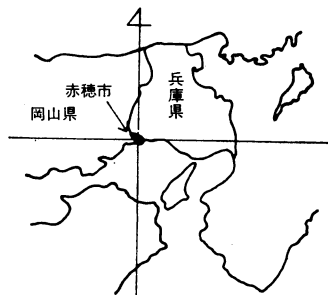
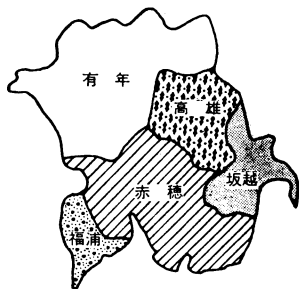
赤穂から西の岡山県側へ、赤穂―東岡山間の開通は昭和三十七年九月である。

即ち、前回の折は、国鉄赤穂線（赤穂―相生間）ができて四年目であった。相生との間が電化したのは昭和四十四年十月である。

利用客は殆んど東行きで、西行の岡山方面はごく少ないということである。

人口の推移 (国勢調査)

年次	人口			世帯数
	総数	男	女	
大 9.10	23,062	11,671	11,391	5,231
昭 5.10	26,809	13,443	13,366	5,727
15.10	29,523	14,721	14,802	6,070
25.10	36,177	16,929	19,248	7,252
30.10	40,544	19,430	21,114	8,236
35.10	40,741	19,451	21,290	8,766
40.10	44,698	21,530	23,168	10,086
45.10	45,942	22,173	23,769	11,238
50.10	49,476	24,253	25,223	13,495



年月日	合併または編入地域	面積	累計面積
昭26.9.1	市制施行(赤穂町、坂越町、高窪村)	69.65km <sup>2</sup>	69.65km <sup>2</sup>
30.4.1	赤穂郡有年村	49.79	119.44
38.9.1	岡山県和気郡日生町大字福浦の一部	7.51	126.95
49.3.31	海岸埋立	0.07	127.00

極東 東経 134° 28'    極西 東経 134° 18'  
 極南 北緯 34° 43'    極北 北緯 34° 51'  
 面積 127.02km<sup>2</sup>  
 標高 最高：黒金山山頂 (海拔430.8m)  
       最低：瀬戸内海海岸 (海拔0.0m)

## 人口動態

年次	自然動態			社会動態		
	出生	死亡	増減	転入	転出	増減
30	789	306	483			
37	694	361	333	1,540	1,716	△176
40	704	337	367	2,115	2,014	101
45	834	327	507	3,500	3,730	△230
48	766	323	443	1,976	2,022	△46

## 流動人口

項目 年度	総人口 (夜間 人口)	流入人口			流出人口			流出入 の差	昼間人口
		総数	通勤	通学	総数	通勤	通学		
30	40,544	510			1,376			△866	39,678
35	40,741	757	170	579	2,998	2,508	490	△2,241	38,500
40	44,698	1,118	794	324	4,761	3,534	1,227	△3,643	41,055
45	45,942	1,472	1,148	324	5,604	4,265	1,339	△4,132	41,810
50	49,476	2,370	2,052	318	5,989	4,577	1,412	△3,619	45,857

昭和30年	計	男	女	(国勢調査による)
流入人口の内	510	388	122	
県内から	274	233	41	
県外から	236	155	81	
流出入差	-866	-877	+11	

市内国鉄乗車客数

年度	区分	総 数	赤 穂 線		山陽本線	一日平均 乗車人員	昭30年 に対する 増 加 率
			播州赤穂駅	坂 越 駅	有 年 駅		
30		1,329,585	781,169	169,500	378,916	3,642	
34		1,818,877	1,097,714	225,814	495,349	4,983	37%増
37		2,385,640	1,539,935	270,830	574,875	6,536	79%増
43	定 期	1,981,186	1,246,393	216,541	456,239	5,428	120%増
	外 期	938,331	703,796	111,742	122,793	2,571	
46	定 期	1,838,549	1,191,084	211,328	436,137	5,023	110%増
	外 期	966,189	732,768	110,506	122,915	2,640	
49	定 期	1,859,950	1,208,692	240,170	411,088	5,095	120%増
	外 期	1,062,182	820,067	118,990	123,125	2,910	

「市勢要覧」の統計のとり方も年により多少違っているので、望む年の項目が出ていないことがある。

上の「市内国鉄乗車客数」の昭和三十五年、四十年など。また、この項目の中でも定期券と定期券外の区別などは出ていない。

上の(表)で、昭和三十年に対する増加率とは、例えば、四十九年の分と三十年の分との差を三十九年度で割ったものである。四十九年度(定期+定期外)は八、〇〇五人だから三十九年度の二・二倍になる。有年は特に定期券が多く、坂越まてしとともに定期外の二倍から三・四倍にもなっている。

定期(通勤・通学)と定期外(一般乗客)との率は赤穂で定期が一・四七倍、坂越は二・〇二倍、有年は三・三四倍。旧赤穂市の中心よりも新市域となった有年・坂越は通勤・通学が多いことがあらわれている。

動 詞

動詞活用形も大体前回に従うことにするが、活用表については、いささか改める。

まず、語例をあげる。これは基本形と重複するので、基本形を省き終工形の欄を設ける。否定形・意志形・連用形・音便形・終止形・仮定形・命令形とする。

否定形はン・ヘンなどに続く形。意志形は学校文法で未然形の一つになる



ワ	ワ	ワ	ラ	マ	バ	ナ	タ	サ	ガ	カ	行
言ウ	買ウ	歌ウ	居ル	読ム	飛ブ	死ヌ	打ツ	出ス	泳グ	書ク	語例
ワ	ワ	ワ	ラ	マ	バ	ナ	タ	サ	ガ	カ	否定形
ユオ(ー)	カオ(ー)	オ(ー)	ロ(ー)	モ(ー)	ボ(ー)	ノ(ー)	ト(ー)	ソ(ー)	ゴ(ー)	コ(ー)	意志形
イイ	カイ	ウタイ	リ	ミ	ビ	ニ	チ	シ	ギ	キ	連用形
ユウ	コオ	ウトオ	ツ	ン	ン	ン	ツ	イシ	イ	イ	音便形
ユウ	カウ	ウタウ	ル	ム	ブ	ヌ	ツ	ス	グ	ク	終止形
イヤ	カヤ	ウタヤ	リヤ	ミヤ	ビヤ	ニヤ	チャ	シャ	ギヤ	キヤ	仮定形
イエ	カエ	ウタエ	レ	メ	ベ	ネ	テ	セ	ゲ	ケ	命令形

ものだが、これに意志の助動詞ウ・ヨウが融合した形、従ってウ・ヨウの融合したものを長音で表わすこともある。連用形はマス・タイに続く形。音便形はテ・タに続く形。一段活用・変格活用では連用形・音便形が同形になる。仮定形はここでは仮定形にバの融合した形になる。命令は、実際には連用形で命令をあらわす場合、例えば、ハヨ行キ、などの形があるが、これとは別に命令形が存在するときはこれを記す。

五段活用

意志形 書コ、書コカ(書こうか)であるが、書コーカともなる。長音になるときは多少迷ったようなときであるともいう。ワ行五段活用ときは「買う」がカウ・コオタのように語幹から変わるので活用表中に記入した。

行コオモテ、行コーオモテ(行こうと思つて)同じように使う。

仮定形としては、書キヤ、泳ギヤの形になる。書キヤ書ケンコトモナイ(書けば書けないこともない)若い人には、書イタラ、泳イダラと音便形にタラをつけて仮定をあらわすことが多い。

高砂市を記した和田実氏の「兵庫県高砂市伊保町」(『日本方言の記述的研究』国立国語研究所編、以下「記述的研究」と略す)では、書カ、泳ガのような形になっている。

命令形としては、書ケ、泳ゲであるが、命令表現としては、連用形を用いてハヨ書キ、ハヨ泳ギのようになることは阪神地方の影響によるものである。

サ行イ音便

前回到サ行イ音便になる語、なりにくい語としてあげたものは次の通りである。

④サ行イ音便になる語

荒す 下す 隠す 乾す 殺す 残す 外す 放す 干す 刺す 出す 動す<sup>イカ</sup> 覚す 起す 飛す 流す 直す

⑤サ行イ音便になりにくい語

浮す 崩す 探す 灯す 押す 通す

今回の調査で、成人は全員④はイ音便になると答えたのは、崩す、探す、灯す、である。前回よりも、なる語が増しているのは、前回のインフォマントよりも今回の方が年令が上であることによるものだろうか。中学生については、かなりゆれているので数では示さない方がよさそうである。

一般に老年層はイ音便になることが多く、若年層ではなりにくい。そして、その語もかなりゆれているようだ。

サソータ	一〇	九	一二	一一	一四	一三	三六	三三	六九
誘 <sup>サ</sup> タ	二	二	四	四	二	二	八	八	一六
アロータ	一	一	一	〇	二	〇	四	一	五
洗ロタ	一四	一三	一五	一四	一五	一五	四四	四二	八六
ワロータ	二	一	三	〇	一	〇	六	一	七
笑ロタ	一三	一二	一三	一四	一五	一四	四一	四〇	八一
オモータ	〇	二	三	二	二	三	五	七	一二
思モタ	一四	一〇	一三	一二	一四	一三	四一	三五	七六
	男	女	男	女	男	女	男	女	
	有	中	赤	中	東	中	計		
									計

略音便

前田勇氏が『大阪弁の研究』で言われた略音便の形がある。「行った」が「イタ」など促音便になるべきものが、その促音がぬけた形である。これがウ音便になるものもある。「思った」―「オモータ」「オモタ」など、語幹が一音節のものはウ音便にはなるが略音便にはなりにくい。「言った」―ユータ、「酔った」―ヨータ、「縫った」―ヌータ、などはいずれも略音便にはならない。ただ、「食った」はクータともクタともなる、モー飯<sup>メ</sup>クタタカなど。調査Ⅲの結果は次の通りである。一人で二通りを使う者、両形とも使わない者があるので調査対象者数とあわないことがある。

「思う、笑う、洗う」は略音便になる方が多く、「誘う」は長音（ウ音便）になる方が多い。  
 ア段とオ段とに活用する語がある。  
 「置く・挟む・並ぶ」がタトム・ハソム・ナロブともなる。また、「出来る」がデケルになる。  
 調査Ⅲでは次の通りである。

タタム	一三	一四	一五	一九	一三	一六	四一	四九	九〇
タトム	六	七	三	三	七	六	一六	一六	三二
ハサム	一二	一四	一四	一五	一三	一六	三九	四五	八四
ハソム	六	三	四	一	六	三	一六	七	二三
デキル	一四	一四	一三	一五	一七	一六	四四	四五	八九
デケル	一	一	三	一	一	〇	五	二	七

上一段活用

行	語例	否定形	意志形	連用形	終止形	仮定形	命令形
カ	起キル	キ(↓)	キヨ	キ	キル	キリヤ	キヨ
ガ	過ギル	ギ(↓)	ギヨ	ギ	ギル	ギリヤ	ギヨ

ラ	マ	バ	ナ	タ	ザ
下リル	見ル	延ビル	似ル	落チル	閉ジル
リ(一)	ミー	ビ(一)	ニー	チ(一)	ジ(一)
リヨ	ミヨ	ビヨ	ニヨ	チヨ	ジヨ
リ	ミ	ビ	ニ	チ	ジ
リル	ミル	ビル	ニル	チル	ジル
リヤ	ミヤ	ビヤ	ニヤ	チャ	ジャ
リヨ	ミヨ	ビヨ	ニヨ	チヨ	ジヨ

一段活用では音便形は連用形と同じである。

否定形は、起キヘン・起キーヘンの併用である。前回には、起キヤヘンも記されているが、今回はそれが聞かれなかったし、被調査も、「聞いたことはあるが自分は使わない」というので省いた。

意志形は、起キヨ、見ヨである。「記述的研究」の高砂市では、起キロ、見ロとなっているが当地では聞かれなかった。

仮定形は、五段と同様に拗音化して、起キヤ起キレンコトモナイケドのようになる。「記述的研究」では、起キラとなっている。ただし、中学生は起キタラの形になることが多い。男子中学生で起キヤを使う者がある。

命令形は一応、起キヨの形があるが、実際には、ハヨ起キのように連用形の用法が多い。

なお、助動詞の項でも述べるが、否定助動詞「ヘン」がつく場合、特に、否定形がイ段音である上一段では、起キヒン、落チヒンとヒンの形になる。尾崎の老人はヒンは若い人の言い方であるという。

下一段活用

ラ	マ	バ	ナ	タ	ザ	サ	ガ	カ	ア	行
呉レル	集メル	並ベル	重ネル	育テル	混ゼル	瘦セル	曲ゲル	受ケル	植エル	語例
レ(ー)	メ(ー)	ベ(ー)	ネ(ー)	テ(ー)	ゼ(ー)	セ(ー)	ゲ(ー)	ケ(ー)	エ(ー)	否定形
レヨ	メヨ	ベヨ	ネヨ	テヨ	ゼヨ	セヨ	ゲヨ	ケヨ	エヨ	意志形
レ	メ	ベ	ネ	テ	ゼ	セ	ゲ	ケ	エ	連用形
レル	メル	ベル	ネル	テル	ゼル	セル	ゲル	ケル	エル	終止形
レリヤ	メリヤ	ベリヤ	ネリヤ	テリヤ	ゼリヤ	セリヤ	ゲリヤ	ケリヤ	エリヤ	仮定形
レヨ	メヨ	ベヨ	ネヨ	テヨ	ゼヨ	セヨ	ゲヨ	ケヨ	エヨ	命令形

各活用形については上一段活用とほぼ同じである。  
 五段活用の「書ク」から「書ケル」などの可能動詞となったときも下一段活用の各活用形と同じようになる。  
 カ変、サ変

来ル	コ	否定形
来ル	コオ	意志形
シ	キ	連用形
スル	クル	終止形
スリヤ	クリヤ	仮定形
セエ	コイ	命令形

形容詞

有年中学男子の※は、コエヘンである。  
 ナ変の「死ヌルトキ」は今回には聞かれなかった。

語例	語幹	推量形	連用形		音便形		終止形		仮定形	
			アカ アコ(一)	アカ カ	アカ カ	アカ カ	アカ イ	アカ ケリヤ	アカ ケリヤ	
コーヘン	一四	一四	一六	一五	一七	一六	四七	四五	九二	
キーヘン	一	二	〇	〇	〇	二	一	四	五	
キーヒン	〇	〇	〇	一	一	一	一	二	三	
キヤヘン	〇	一	〇	二	一	一	一	四	五	
コヤヘン	(※一)	〇	〇	〇	〇	〇	(※一)	〇	(※一)	
	男	女	男	女	男	女	男	女	計	
	有	中	赤	中	東	中	計			

カ変否定形は、コーヘンが一般で、キーヘン・キーヒン・キヤヘン・コヤヘンがある。  
 ヤヘンのヤは、「来はせぬ」からの転か。  
 今回の調査で、尾崎の老人はキヤヘンを使い、コーヘンは使わないという。  
 ところが、中学生はコーヘンが多く、キーヘン・キーヒンで、キヤヘンは使わない。  
 調査Ⅲの結果は次の通りである。

薄イ — ウス — ウスカロ — ウス(ー) — ウスカッ — ウスイ — ウスケリヤ

連用形は、アカナル(赤くなる)とアコナルの併用であり、さらに、アコーナルと長音にもなる。なお、中学生は、「赤くなる」はアカナル、アコナル、アコーナルで、「明るくなる」はアカルナル、アカルーナルで区別があるが、尾崎の老人は、「赤くなる」も「明るくなる」もともにアコナルで、酒のんで顔がアコナッテキタ、電気がツイテアコナッタと区別がない。

アカナル、アコナルの併用でありながら「長くなる」「高くなる」はナゴナル、タコナルであって、ナガナル、タカナルは使わないという。前回にはナガナル、タカナルは「少ない」と記されている。

### 形容動詞

語例	語幹	推量形	連用形	音便形	終止形	仮定形
静カヤ	シズカ	シズカ ヤロ(ー)	シズカデ シズカニ	シズカヤッ	シズカヤ シズカナ	シズカナラ

指定の助動詞がヤであると同じく形容動詞の終止形もヤである。

終止形のシズカナは、シズカナナアの形である、これは、必ず次にナアという感動の助詞などがつく場合に限る。形容動詞のナ終止は江戸時代まで一般にあった用法である。ナ終止は中学生にもある。

尾崎の指定助動詞ジャを使う人は形容動詞も同様である。

### 助動詞

ヤ・ジャ



指定の助動詞は、中国地方岡山県はジャ地域であり、佐伯隆治氏の『播州赤穂方言集』に、赤穂はジャ・ヤ並存であると記してある。前回には、老人層はジャ、若い層はヤと記してある。今回の調査の結論を言えば、千種川東南の尾崎地区ではジャ、千種川の西北、市の中心部になる加里屋地区では五十才の人も中学生もヤである。加里屋の人は尾崎を「浜」と言い、「浜ではジャを使うが、こちら（加里屋）ではヤを使う」と言う。

ヤを強めて女性はやーナという。机ヤーナ（机だよ）。「これ何?」「机ヤーナ（机だよ、それ位のことわかってるでしょう）」ホンヤケド（そうだけれど）、浜の尾崎ではホンジャケドとなる。

活用（前回と同様）以下「未然・連用・終止・連体・假定・命令」の活用形による。平仮名は接続する語である。

ヤロウ	ヤッタ	ヤ	ナ	ナラ	○
ジャロウ	ジャッタ	ジャ	ナ	ナラ	○

意味

1、指定

2、並立助詞的用法 ナンヤカンヤ言<sup>ユ</sup>ーテ（加里屋）、ナンジャカンジャ言<sup>ユ</sup>ーテ（尾崎）

3、間投助詞的用法 先生ナラヤナ

4、接続助詞的用法 ホンヤケド、ソヤケド、ヒヤケド（だがそれにも拘らず）、但し、ヤガ、ジャガはない。前回にも報告されている、母<sup>ハ</sup>ジャ人という言い方がある。（これは、母<sup>ハ</sup>者人の意か）

前回との比較―前回は加里屋を主とした調査であるが、老人層はジャ、若い層はヤで、先生ヤナエ（先生ではない）が多く、先生ジャナエが少ないということであったが、今回の調査では、加里屋はヤ、尾崎はジャという対立を



丁寧の意をもつ指定。

ダスは大阪、ドスは京都といわれ、その境界は摂津と山城との境であるという。このダスは神戸では少なくなっていて殆んど用いられない。

赤穂ではナンダッシャ・ナンダッシ（なんですか）という使い方をする。

前回到

活用

○ ダシた

ダッス  
ダハ

○ ○ ○

ダッカ、ダッケエ（ですか）、ダッシャロ（ですよか）、ダッサカエイ（ですから）、ダッソ（ですよ）があるが、ダッケド（ですけど）のようなやや弱い感じの表現や、もともと丁寧に言う言い方などは女性に多い。姫路から西にあるダハン（「です」を強めて「ですよ」に当る）は今では女性に限るとのこととある。

前回到にもダハンは女性に限るとあるように、男性がダハンを使うとおかしく感じるという。しかし、後に記すように男子中学生でさえ、わずかながら使用者もあるようだ。

ダハンは、デスが大阪的にダスになったものに、S→hの変化で、ダスワから（ダッサ）↓ダッセ↓ダッハ↓ダハとなり、それを強めてダハンとなったものと思うが、ダッセの形はあるが、ダッサ（ソーダッサ）の形はない。終止形ダンはイマイクトコダン（今、行くところだよ）となる。

調査Iで女子中学生の四人中二人はときどき使う。二人は使わない。ソーダッケの方はダハンを使う二人も聞くこ



受身

カ変 コラレル・キラレル

サ変 シラレル (サレル・セラレルは使わない)

可能

カ変 コラレル・キラレル・コレル

一段 見レル・起キレル・出レル

中学生などは、カ変・一段活用にはレルとラレルどちらもくつつくようである。が、尾崎の成人ではレルで、来レル・起キレルとなる。

可能の調査Ⅲの結果は次の通りである。

カ変の場合はレル、一段活用にはラレルがつく方がいくらか多いようである。

	有		中		東		計		計
	男	女	男	女	男	女	男	女	
来 <sup>コ</sup> レル	一一	一一	一一	一四	一一	一三	三五	三九	七四
来 <sup>コ</sup> ラレル	四	一一	四	三	五	一一	一三	二五	三八
着レル	○	○	三	六	一四	一三	一七	一九	三六
着ラレル	一一	一一	一三	一一	(※一) 六	一四	三一	三七	六八

(※は、着ラレラーレのような言い方をすることだ。)

ス サス

使役 許可 放任

下一段型

セ セ

セル

セル

セリヤ  
セラ

セイ

サセ

サセ

サセル

サセル

サセリヤ  
サセラ

サセイ

五段型

サソ

サソ

サス

サソ

サセ

ササ

サシ

サス

サス

サシヤ

サセ

終止形のサー・ササーはスワ・サスワの転。

仮定形のシャ・サシャはセバ・サセバの転。

カ変はコサセル・キサセル並存で、ほかに来<sup>コ</sup>ラスもある。ココエ来<sup>コ</sup>ラシタラアカン（来させてはいけない）

今回の調査Iではキサセルが多く、コサセルは少ない。前回同様コラスもある。

サ変はサセルで、シサセル・セサセルはない。

一段活用につく場合は受ケラスであるが、今回の調査Iで女子中学の四人のうち二人はウケラスも使うが普通には四人ともウケサスの方が多という。調査IIで尾崎の成人でウケサスルの言い方を使うという人もあった。

ウ・ヨウ・ロ

意志・推量

行こう・起きよう、が、行コ・起キヨと短くなる。

ヨがロになるのは播州方言の一般的傾向である。  
意志、推量に、ウ・ヨウよりヤロ・ダッシャロを使うことが多い。  
前回にもある通り

カ変は行テコ（来よう）と短くなり、一段活用では、起キヨ・起キロ・調ベヨ・調ベロ・シヨ（サ変に限り拗音）、シヨとなるのであるが。

今回の調査では、起きよう（意志）はオキョーと拗長音になる、カ変もココエコー（来よう）思ウと長音になる。が、一段（見よう）はミヨ・シロと短かい。また、起キロが老年層に多く、起キヨが一般的である。従って調査Ⅲではロは少ない。

見ヨ	一一	一四	一六	一四	一六	四三	四四	八七
	男	女	男	女	男	男	女	
見ロ	四	一	〇	一	一	〇	五	二
	有	中	赤	中	東	中	計	計

メー

否定的意志・否定的推量・禁止（マイに当る）

五段動詞終止形・助動詞マスにつく。行クメー、言ウメー、アリマスメー。一段系には、二度ト来メー、何ニモス  
メー、見メー、起キメー、助ケメー、となるが、特に意志をあらわすときに行コメー、来ヨメー、シヨメー、見ヨ  
メー、助ケヨメーとなる。

ナンニモ言メー、ナンニモ書クメーとなるほかに、ナンニモ言オメー、書コメーともなる。

今回はこのメーはごく少なく、マイを使って二度ト来オマイとなる。女子中学生では、メー、マイは使わず、行カントコである。尾崎の成人ではメーを使う。

ン

活用

○ ズンンナ ○

仮定形のナはネバの転。六時前ニ起キナアカン。

ナンニモセズニ(しないで) 同じ意味でナンニモセントとなる、ハヨセント(しなければ) アカン。また、ナンニモ言ワント(言わないで)とハヨ言ワントアカン(言わなければいけない)。

前回にもある通り、ズは、ズニの形や、ナンニモセズヤのように、ズヤの形のような慣用的な用法がある。

今回の調査でも成人・中学生ともにンを使うが、一般的にヘンの方が多い。

ヘン・ヒン・エン

「行キワセン」のセンの転。上位語がイ段音の時は同化してヒンとすることがある。ヘンがエンとなることもある。ヘヌワの転でヘナともなる。

起キヘン・起キヒン・落チイヘン・落チイヒンとなるが、今回の調査Iでは、女子中学生でもAはヘンのみ、BCはヘンもヒンも使いヒンの方が多という。尾崎の成人は大人はヘンで、ヒンは子供の言い方だという。上位語がイ段音で終らなければヒンとはならない。降ラヘンである。抱カエンデモカマヘンとエンとなることは中学生ではなく、成人でもごく少ない。ヒンは若い人にできた新しい形か。

五段動詞ではア段・エ段をうける。





ヘンとナンダとがいつしよになったものである。意味は打消し過去である。しかし、もっとも一般的に使われている打消過去は、ヘンカッタのようである。

やはり、尾崎の成人ではヘナンダを使うが、女子中学生はヘンカッタとナンダである。

調査Ⅲは次のようである。

知ラヘンカッタ	六	男	有	知ラヘナンダ	〇	女	中
	八	男	中		〇	女	赤
知ラナンダ	一	男	赤	知ラナンダ	〇	女	中
	三	男	中		一	女	東
知ラナンダ	一	男	東	知ラナンダ	〇	女	中
	二	男	計		一	女	計
知ラナンダ	一	男	計	知ラナンダ	〇	女	計
	二	男	計		一	女	計
計				計			
計				計			

活用・意味・接続ともにほぼ共通語に準じる、ただ動詞の接続の上で一、二問題があるが、これは動詞の項で述べる。

テー・タガル

希望をあらわす。

活用

- タカロ
- ター
- タカッ
- ター
- ター
- タケリヤ
- 〇

タガロ            タガッ            タガル            タガラー  
 タガリ            タガ            タガラー  
 タガリヤ            タガレ

行キトナツタ、行キトーナツタ、行キテーナツタ。前回にもある通り、高砂市では見ータイ、出ータイ、来ータイがあるが赤穂にはない。

今回の調査では全般的に行キトナツタと短かい方が多く、行キトーナツタは少ない。ただ行キテーワのときは延びる。仮定形が行キタケリヤは男で、女は行キタカッタラの方が多い。連用形の見トーモナイ、言イトーモナイは使

う。  
 調査Ⅲは次の通りである。

行キトナツタ	一一	男	有							
行キタナツタ	四	女	中							
行キテエナツタ	〇	男	赤							
	〇	女	中							
	一	男	東							
	〇	女	中							
	二	男	東							
	四	女	中							
	三	男	計							
	四	女	計							
	七		計							

マス            丁寧            活用  
 マヘン            マシてん  
 ママ            ママ            ママ            ママ  
 マッ            マッ            マッ            マッ  
 ハ            ハ            ハ            ハ  
 ソ            ソ            ソ            ソ  
 ナ            ナ            ナ            ナ  
 マ            マ            マ            マ  
 ス            ス            ス            ス  
 〇            〇            〇            〇

マスのマスワからマサーそれがS—h交替でマハーそれを強めてマハンとなったと考えられる。これはダス(です)からダハンになる過程と同様である。ダハンが体言につくのに対して、マハンが動詞につく。行キマハンのように連用形につく。行きマホ、行きマッそ(行きますよ)

これもダハンと同じく女性語であるという。女子中学生などは使わない、成人女性語ということになる。

このマハンもマハの形で北播の西脇市にもある。ただし、西脇市のマハはもっと、終助詞化していて「ね」「よ」の意味に近く、アカンマハ、知ランマハ、寒イマハ、ソヤナイマハ、走ッリヨルマハなどの形もあり、『北播の方言』(丸山三郎編著)によると、

①ダス以外のことばに接続する。

②動詞や形容詞などに直接接続する。

③打消の助動詞「ない」にもつづく。とある。

ナハル

尊敬。大阪にあるナハルと同じ用法。ナサルからS—h交替によるもの。但し、赤穂ではハル・テハル・タハル・ヤハルは使わない。

活用

○ ナハッ    ナハル    ナハル    ○    ナハレ

動詞連用形について行キナハル、行キナハレなど。但し、ナハルという敬語表現は、尊敬の助動テ(行キヨッテヤ)などよりも程度が高いので一般にはテの方が多し。これも成人女性に多く中学生程度の者はあまり使わない。

調査Ⅲでもごく少く次の通りである。

行キナハル		
○	男	有
○	女	中
三	男	赤
七	女	中
三	男	東
四	女	中
六	男	計
二	女	
一七		計

ヨル

継続態

活用

ヨラ ヨレ  
 ヨロ ヨリ  
 ヨッ  
 ヨー  
 ヨル  
 ヨー  
 ヨリヤ  
 ヨレ

接続は前回にも島田氏が書かれている通り、上位語の活用行によって三種になる。

(1)カ・ガ・サ・ザ・タ・ダ・ラ・バ行―イッキヨル・クサツシヨル、打ツチヨル、走ツリヨル、飛ツビヨル、起<sup>オ</sup>ツキヨル、落<sup>オ</sup>ツチヨル、打ツチヨル、走ツリヨル(但し、着<sup>キ</sup>ヨル・来<sup>キ</sup>ヨル・為<sup>シ</sup>ヨル・シヨル)

(2)ナ行・マ行―去<sup>イ</sup>ンニヨル・飲<sup>シ</sup>ンミヨル・(但し、煮<sup>キ</sup>ヨル・見<sup>ミ</sup>ヨル)

(3)ワ行―笑<sup>イ</sup>イヨル・歌<sup>イ</sup>イヨル

(1)は促音、(2)は撥音が入り、(3)はそれらが入らない。しかし、今回の調査では、降<sup>シ</sup>ツリヨルもあるが、降<sup>リ</sup>ヨルもかなり多いようだった。

トル

継続態（今読ンドルトコヤ）・既然態（ソノ本ハ一ト月前ニ読ンドル・死ンドル）

活用

トラ	トリ	トル	トル	トリヤ	
トレ	トッ	トール	トール	トラ	トレ

連用形トッはテ・タに続く促音便。終止形のトンはナ・ヤに続く擦音便。

書イトラヘン・書イトレヘンは同じように使う。

前回にもある通り音便の形は、カ五、サ五、ガ五はイ音便（書イトル・灯トキイトル・泳イドル）タ五・ラ五・行く・落ちるは促音便（立ツトル・取ツトル・行ツトル・落ツトル）ナ五、マ五、バ五は擦音便（死シンドル・読シンドル・飛ヒンドル）ワ五はウ音便（言ユートル・笑ウートル）

トク

「ておく」の意

活用

トカ	トキ	トク	トク	トキヤ	
トケ	トイ	トク	トク	トカ	トケ

未然形は書イトカヘン・書イトケヘンと同じように用いる。命令形の書イトケは男性語で、女性は書イトキの形をとる。

タル

「てやる」の意

活用



書イテーヘン	九
書イトーヘン	一一
	一二
	一四
	一五
	一五
	三六
	四〇
	七六

ソウヤ

伝聞

活用

○ ソーニ      ソーヤ      ソーナ      ○

悪イソーニ聞イタケド。悪イソーヤナ、落チタソーナデ

ヨウヤ

伝聞

○ ヨーニ      ヨーヤ      ヨーナ      ○

アカンヨーニナッタ・スグ来ルヨーナ。

ラシイ

推量

活用

○ ラシカッ      ラシイ      ○      ○

雨ニナルラシイ。明日<sup>アツ</sup>カララシイデ。

助詞



前回に山内氏が記しているように、格助詞の中で省略される場合は、音節関係（例えば一音節語を長音化した後は殆んど省略）や陳述副詞の介入、可能動詞、願望助動詞の述部に対する対象主語の場合、他動詞の目的格に立つ場合などに多い。

## ガ

主述関係を明確に打ち出す場合は省略しない。

雪ガ降ル。海ガ荒レトル。風ガナイ。

日常会話で状況判断がお互いに容易な場合は省略することが多い。

才前 傘○ナイノカ。

マド○アイトル シメトケ。

願望や好悪・可能の対象となるときは省略することが多い。

酒○ノメンヨウナ奴。酒○ノミタイ、コノ本○読メル。

一音節語を長音化した場合は省くことが多い。

モ一<sup>ウ</sup>字一<sup>ウ</sup>ヨメルヨ一<sup>ウ</sup>ナツタ。齒一<sup>ウ</sup>痛インカ。

ノ・ノン

準体助詞の場合はノ・ノンで表わすが「ノ<sup>ハ</sup>」「ノン<sup>ハ</sup>」の方が体言化意識が強く働いている。

コレ誰ノヤ、ワシノンヤ（「ノヤ」「ノン」は「ネヤ」「ネンヤ」「ンヤ」ともなる。一コレ誰ネヤ、ワシネンヤ。

ワシンヤ。）

オ（ヲ）

他動詞を修飾格とする目的格のヲは省くことが多い。

原朗氏の調査によると、高砂市のおばあさん二人の三十分間の対話中、現われたのは、ただ一回だったということ  
で、「が」よりも省くことがさらに多い。

飯イ○食ウタ。酒○飲モカ。

上の文又は語をあたかも中止法の如く体言の形で止め直接に動詞に続ける用法がある。

ヨ一字イ○見テミイ。

今チヨット物○考エトツタトコヤ。

対句的用法のときも省く。

映画○見タリ オ茶○飲ンダリ。

二

田 良 二  
兼 出 良 二  
前回にも引用されている原朗氏の「播州方言の助詞」(『国文論叢第四号』神戸大学)によると、ニの省略はあま  
りないが、播州方言としては場所を示すニのときにへを使うということである。家ニ帰ル↓家へ(エ)帰ル

ト

「と言う」のトは普通省く。田中ユ一人 方言の研究ユ一本ナイカ。これは近畿方言一般といってもよく、また播  
州一般にも広く見られる。「記述的研究」にも次のようにある。(これは赤穂も同じである。)

このトは「何と」に限り省くことができないで、何チチユ一。

ト思ウ・ト違ウ(ではない)のトは省くことができ、アッタ○思ウケド、アンタノ傘○違ウカとなる。

ヨカ・シカ

起点を示すときはカラを用いるが、比較のヨリはヨカ、シカを用いる。



文を終止させるわけではない。これも前回にも記されているように中年以上の人が用いる。コソレはそれのくずれたものとみる。

世話コソスレ、厄介ニワナラン。親ナラコソレ心配スルンヤ。

グチ

「のまま」箱グチホシイワのように、箱ごと。鞆グチナクナッタ。入レモングチ持ッテコイのようになる。

ワール・カール

二 終助詞で、ソソナコト知ランワール、ソソナコト知ルカールがある。強い語勢をあらわすもので、ワールは「ワイ」から変ったもので、カールは「カイ」を強めたものだろう。

良 ハヨ仕事センカール(男)、ソレ位ノコト知ッランカーノ(女) (当然知っているべきだ)。男はカール、ワール。女はカーノ、ワールとなる。知ランワール(男)、知ランワーノ(女) (知らないよ) 但し、老年層では(今回は尾崎で)男女ともカールを用いるようだ。そして、老年層(尾崎)では知ルカーノ(知らないよ)は同輩に対して、知ルカールは目下に用いるということであった。ということは、カーノの方がやさしい響きがあり、カールは強い響きがあるのだろう。

男

(私は) 知ラヘナーレ (知らないよ)  
(あの人) 知ッテいるはずがない、

女

(私は) 知ラヘナーノ (知らないよ)  
(あの人) 知ッテいるはずがない

右の知ラへの「へ」は否定「へん」である。  
 調査Ⅰで女子中学生は知ルカーナを用いていた。  
 調査Ⅲは、中学生だから左のように少ない。

	有		中		赤		中		東		中		計		計
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
知ランワレ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	一四
知ランワノ	二	四	一	六	(※三)	○	一	八	(※一〇)	○	四	一七	○	(※二一)	二一
知ルカーレ	三	○	一〇	二	二	一三	○	二六	二六	二	二六	二	二八	(※五)	二八
知ルカーノ	一	一	三	五	二	一三	二	六	六	二	八	二	二八	(※五)	一四

右の表の赤穂中学女子の※印三名はワリーナで、赤穂東中学女子の※印二名は知ラヘンワリーノである。

ワリー・カーレと同じように、否定のヘナレ(男)、ヘナーノ(女)がある。知ラヘナレ、知ラヘナーノである。  
 ワリー・カーレは古くは神戸でも用いていたことだが、「記述的研究」にはレとして次のように記してある。

レ(男)、カ・コ・ガ・ワに荒さを添える。誰が貸シタルカレ、知ランガレ、有ルワレ、有ラレ。

ド・デ

ゾの意で、ドは男、デは女。カマヘンド、カマヘンデ(かまわないよ)

ケエ・カア

疑問の終助詞で、ケエが男、カアが女という。バス来タケエのように用いて純粹に疑問をあらわす場合と、コレ貸シトツケエ(男)と、心やすい人に軽くたずね、「貸して下さい」と同じような意で用いる場合とがある。これが女

子では貸シテッカアとなる。

## 代名詞

普通、文法研究としては、代名詞を扱わず、語彙の分野で扱うことになるものであるが、本稿は前回の「改訂版的」意味をもっているので、前回到「表現篇」(山内潤三氏担当)の中で扱った「人称表現」としての代名詞をここにあげることにする。

本項は、前回の山内氏の「人称表現」を殆どそのままあげ、ところどころ今回の調査結果を入れることにする。

### 自称

ワシ 青・壮年の男子を中心層にして中学・高校男子から老人に至る年齢層に最も広く、且つ自然な日常語として使用されており、地域差も少い。女子自称語の「ウチ」の使用頻度と共に自称の第一である。但し、尾崎地方では女性の中、老人と、労働に従事の婦人には頻繁に使用される。

ボク 小中学校生徒男子は、殆ど「ボク」である。また、高等学校在学中や、青年同士の普通の会話では、この「ボク」が優勢で、「ワシ」「オレ」は後退している。

ワイ 男子の青少年から壮年にかけて一部または時に使用されるが稀である。なお、ワイは自称で、ワレは対称である。

ワイラ 「ワイ」の複数としても使用されるが、「ワイ」と同じ意味で単数としても使用される。「ワシラ」に比し卑俗感がある。仮屋地区にはなく、尾崎地区で使用される。

オレ・オラ ともに、尾崎の男子青年層以上であるが、「オラ」の方が普通、「オララ」も稀に聞くことがある。

ウラ 男子自称として塩屋・尾崎地区の壮年老年層に使用されるのみ。中心部には皆無である。

尾崎では老女も使うことがある。一般に老女はアッシである。

ウラの複数はウララである。「自分の家」はウラガである。これはごく稀に老人が使うものとなった。

オッテ 「オッテナ」（自分の家）に普通使われるが、稀に自分を指して「オッテ」という。例（オッテラ ソンナコトセエヘン）自分らそんなこしない）

ウチ 男子自称「ワシ」と共に中年以下の女性に最も多く使われる。複数形「ウチラ」の使用もまた同じ。しかし、今回の調査で、女子中学生ではウチは減少しつつあり、ワタシになっている。男子中学生はワシよりもワイ、ワイが多い。

### 対称

オマハン 男子青・壮・老年層が同等または目下に向けて呼称する時、最もしばしば用いる。

オマエ 男女とも目下に用いる。オメーとはならない。

オンシ 男が目下を呼ぶ語で、塩屋・尾崎・高雄・御崎・大津に見られ、仮屋でも聞かれる。中山・真殿では使わない。（加里屋の南に上仮屋がある）

女性用語としては、尾崎と塩屋から日生方面ひなせにかけ、中年以上の女（自称にウラを用いる女性）が女同志または男児に対して使う。

男女ともオンシを使用するのは三十才以上。複数形「オンシラ、オンシヤラ」

オンシャーは母親が子に、また、若い衆が小中学生に、叱責または問い掛けとして稀に用いる。（例、オンシヤラ（複数形）何ションゾイ）

前回でも記しているが、オンシは赤穂言葉という意識をもっている。今回（昭和五十一年八月）県佐用郡上月町で、「オンシを用いるかどうか」をたずねたところ「オンシは赤穂の言葉」と答えた。

オドラ 小中学生男子および青壮年（尾崎・塩屋）の軽蔑を含む対称。

オドレ オドラより一層憎悪をこめる。

複数形はオドララ・オドレラであるが、オデューラと呼ぶこともある。

アンタ 女性対称で最も多い。目上には使わない。仮屋では中年男子も時に使用する。

アンタハン 目上または同僚に使う中年女性語、敬意がある。

ワレ・ワレラ 仮屋では稀であるが、尾崎はじめ周辺部では割に自然に用いる男性用語で、対等または目下を呼称する時に使う。稀に「ワレラマタ妙ナコトシタナ」（尾崎、子供の母親が近所の子を叱っている言葉）の如く婦人も使用されることがある。

前回到、対称としてのワイをあげ、「稀に使用」としているが、今回の調査では、ワイは自称だけであると答えたので省くことにする。

メンメラ 元来は「銘々」であろうが、赤穂方言においては、男子の自称・対称共に用いる。常にメンメラと複数形をとり、一人に向かってメンメと呼びかけることはない。

ソンナコトシタラメンメラノ損ジャ（自称複数 ワシラの損だの意）

メンメラ何ションノ（対称複数 オ前ラ）

この「メンメラ」には卑語の感じが存し、殆ど目下に用いる。

ガンラ 「ガキラ（餓鬼等）」の意か。純粹に対称と言えないが、地区が違えば、対手（または第三者的にその土地）の地名を冠して「何所のガンラ」と呼ぶ、同一地区同志では決して言わず、多くは地区相対してお互いに侮蔑し合う時、例えば「尾崎のガンラ何ぬかす」（仮屋↓尾崎）のように、単数・複数ともに「ガンラ」で、ガンララはない。周辺部ではガキラであって、ガンラの方は用いない。



「私の家」をあらわす語として、

男子では、オツテネ（尾崎）、オツテー、ウツテネ、ワシトコ（仮屋）ワシネ（仮屋、尾崎）オラネ（尾崎）等があり、ウラネ・オクネは現在殆ど用いられない。また、尾崎のオツテネは、オツテネ行コカ（お前の家）ヨカッタラ、オツテネ来イヨ（私の家）のように、君の家・私の家両方に使う。

女性の場合は、ウチトコ（仮屋）、ウチノイエ（中山）、ウツトコ（仮屋・尾崎）が最も多く、ウチネー（尾崎）が続く、たまに、コチガイエ（中山）もある。

前回に、女性のウツネは殆ど用いないとなっているが、今回の調査では御崎の成人女性が使うと言っていた。他称・不定称として、前回に次の表をあげている。

コイッ	ソイッ	アイツ	ドイッ	男子用語
ケーツ	ソエツ	アエツ	ダエツ	卑俗語
	セーツ	エーツ	デーツ	
コノヤツ	ソノヤツ	アノヤツ	ドノヤツ	男子用語
コンナヤツ	ソンナヤツ	アンナヤツ	ドンナヤツ	卑俗語
ケーナヤツ	ソエナヤツ	アエナヤツ	ドエナヤツ	
	セーナヤツ	エーナヤツ	デエナヤツ	
			デーナヤツ	
コンナリ	ソンナリ	アンナリ	ドンナリ	若い女性語
				(コノ人・アノ人の意)
コレ	ソレ	アレ	ドレ	
コチラハン	ソチラハン	アチラハン	ドチラハン	丁寧な語

コノヒト

ソノヒト

アノヒト

ドノヒト

ドンナヒト

ドナイナヒト

ドネーナヒト

共通語の用語に同じ

この表について、今回、調査Iで女子中学生四人にたずねたところ、「コノ人」の意のコンナリは右で若い女性と  
なっているが、中学生では使わないと答えた。

なお、調査Iの四人の女子中学生では、コンナコト(A・B)、ケエナコト(C・D)、コンナニスル(A・B・C  
・D)、ココラヘン(A・B・C)、ココラタリ(C)、アンナコト(A・B・D)、エエナコト(C・D)、ドンナ  
コト(A・B・D)、ダエナコト(C)、ドナイシタン(A・B)、デエシタン(C・D)となっている。

尾崎の成人は、右の表の殆どを使う。